

「子どもが真ん中にある」

上教大・清水雅之教授

第10回サミットでのシンポジウム。第1部では、第1期卒業生で初代生徒会長、関東の大学を卒業後の現在も教育分野を学んでいる高橋千尋さん(23)が「地域が学び舎とは何か」故郷を離れて思うこと」を発表。旧松里小学校出身で6年生時に同小は松之山小学校に統合、そのまま松之山中学に進学。中学3年生時にまつのやま学園になった高橋さん。「小学校も中学校も、入学した学校名で卒業したことがないんです」と笑い、学園時代を振り返った。

高橋さんは、つくし会で学園の運動会運営を行うなど活動。運動会と学園フェスタ(文化祭)では、地域住民が参加できる仕組みを考え「大人も楽しむことで子どもも楽しめる」と感じ参加種目を

増やし、フェスタでは地域の方への恩返しをと山菜採りで得た収益で品物を買いくじ引きを取り入れるなど、地域と共に楽しく考えながら進めてきた」とし、「成し遂げたことをできる環境にあったこと、学校生活では

見て、考えて行動する力は今でも生きている」。さらに「松之山は大人がまず楽しんでいる。それを見て子どもたちはやってみようかなと思うことが多かった。地域が学び舎だった」と語った。

第2部のパネルディスカッションでは、雪里留学コーディネーターで初代まつのやま学園長の久保田智恵美さんを中心に、渡邊学園長、スキー学習ゲストコーチ・アルペンスキースラロームでイタリア・トリノオリンピック出場のスラロームで

ん、森の学校キヨロロの小林誠さん、学園運営協議会の柳一成さん、PTA会長の関根勝さん、地域おこし協力隊で家族で移住し学園の保護者でもある杉山光代さんの7人が、まつのやま学園に関わる一人ひとりの立場や使命、思いなどが語られた。

キヨロロ学芸員の小林さんは、日頃から学園とキヨロロが連携する状況を伝え「学園の外に出るとすぐ横にブナ林があ

り、自然を自分ごとにと捉えやすい。近年、経験の消失と言われているが、雪国ならではの自然を守る大切さが自然と未来へ循環しているのではないか」。一方、星さんは冬の体育の時間でアルペンスキーやクロスカントリースキーや授業に9年間で110時間取り組んでいることに触れ、「スキーで県内高校に進める仕組み作りをすることで、もっとスキーをしたい子が学園を選択肢にすること

ができるのでは」と指摘するなど、学園の今後を視野に入れ考える必要性を語った。

サミットの最後は上越教育大学の清水雅之教授が講評。清水教授は過去、旧浦田小学校で教諭をしていた経験もあり、まつのやま学園の特色でもある『まつのやまタイム』を中核にした教育活動を「子どもが真ん中にある学校。子ども同士が自ら考え活動に移し、自然と中学生が小学生へと教えるなど自分たちがしているなど自分たちがしている姿が見られる」さらに「サミットを通し、子どもたちが他者と語り合い、地域の未来を共に考える機会。その過程を通し、地域の一員から地域の創り手へと育っていくのではないか」と話した。

今回のサミットは、これまでの実践を共有し、これからの学びを地域と共に考える機会となった。



パネルディスカッションでまつのやま学園への思いや使命など語った(10日)